台大日本語文研究第 24 期
2012 年 12 月，頁 227-258
2012-10-16 收稿，2012-12-12 通過刊登

“MAA”的使用傾向分析
—為提供更好的會話指導上之說明—

黃英哲*

摘要

本篇論文乃針對“MAA”的使用機能、出現位置與適當的使用場合三方面做一詳細解析。筆者認爲“MAA”的原義應是「說話者即時的感受預告」，而「保持個人模糊立場」與「維持對話流暢」則是由原義分化出來的用法。有關“MAA”的出現位置之分析，則針對“MAA”的前項表達與後項表達，來比較日語母語話者與非母語話者之異同。分析的對話資料有 ET （JJ）（TJ）與 KY 資料語庫，資料語庫中之對話皆採一對一之面談形式進行。有關“MAA”出現位置之主要分析結果有五：（1）由「接續型之表達」與「說話者的感受陳述」之間出現“MAA”的比率較多之現象推論，“MAA”確實擁有預告個人即時的判斷或感受之特質。（2）“MAA”的前項表達中的「標幟型之表達」，以“ANOO”“E（長音）”“E”“HAI”“UN”“E（下降音調）”“N（長音）”的總出現率最高（62.7%）。（3）“A（促音）”“UWA”等表達乃屬於說話者內在層面突然發生的緊急感受表達；而“MAA”則用於因外在事物引發說話者欲表達自身之感受。因此“A（促音）”“UWA”與“MAA”之結合使用較難產生。（4）日語母語話者們在“MAA”之前項表達裡較集中使用標幟型與接續型之表達；而日語能力較低之學習者們則傾向隨意使用“MAA”。（5）比起“MAA”的後項，“MAA”的前項較容易出現標幟型之

* 大葉大學應用日語學系副教授

表達。此外，論文最終節則針對某些無法使用“MAA”的狀況與場合做一探討。

關鍵詞：“MAA”、正前項之表達、正後項之表達、標幟型之表達、接續型之表達

An Analysis of the Usage of the Expression "Maa": Towards a Better Conversation Instructions

Huang, Ying-che*

Abstract

The purpose in this research is to analyze the function, appearing way and the proper usage of*"Maa"*. The primary meaning of*"Maa"*is that someone prepares to claim his viewpoint at some specific moment. The usage of*"Maa"*which showing vague situation and making utterance fluently originates from the primary meaning of *"Maa"*. The data for analysis are ET corpus (JJ) (TJ) and KY corpus. All of conversations are interview-style conversations which occurring one-on-one. The appearing way of *"Maa"* were examined by analyzing the expressions in front and back of *"Maa"*, and after comparing the usages of *"Maa"* between Japanese native and non-native speakers the main viewpoints can be took up as follows: (1)The appearance ratio of *"Maa"* is high between "the expression used as conjunction" and "the statement of speaker' s claim". This fact shows that *"Maa"* is an expression showing someone preparing to claim his viewpoint at some specific moment. (2) The appearance ratio of the expressions likes *"ANOO""E(prolonged sound)" "E" "HAI" "UN" "E (fall intonation)" "N (Prolonged sound)"* are high in front of *"Maa"* (62.7%). (3)*"A (with double consonant)""UWA"* are the expressions showing urgent feeling.*"Maa"* is the expression showing viewpoints about others. The former and latter rarely appears together. (4)In the data of Japanese native speakers, the usages of the expressions

* Associate Professor of the Department of Applied Japanese Language, Da-Yeh University

used as markers or conjunctions are more over than other expressions in front of *“Maa”*. The basic Japanese learners seem to tend to use *“Maa”* by random. (5)The expressions which regarded as marker in front of *“Maa”* will be more than in back of *“Maa”*. Some improper usages of *“Maa”* have been explained in the last section of this paper.

Keywords: *“Maa”*, the expression in front of a word, the expression behind a word, the expression used as marker, the expression used as conjunction

「まあ」の使用傾向の分析
―より良い会話指導上の記述のために―

黄英哲*

要旨

本稿では「まあ」の機能分類、出現位置、適切な使用場面について分析した。「まあ」の原義について「即時の判断や感想を提示する予告表現」として捉え、その原義から「曖昧性を示すこと」と「婉曲的に伝えること」の機能へ分化している解釈をしてみた。「まあ」の出現位置については、特に「まあ」の直前と直後の表現における日本語母語話者と非母語話者の使用状況の比較をした。分析に用いた会話データはETコーパス（JJ）（TJ）及びKYコーパスで、どれも一対一のインタビュー会話である。出現位置に関する主な結果については、次の5点が挙げられる。(1) 接続的表現と主張陳述の間に挟まれてきた「まあ」の使用が多い現象から、「まあ」には主張陳述の予告の性質が強いという推論ができる。(2)「まあ」の直前にある「標識的表現」は「あのー」、「えー・え」、「はい・うん・え↓」、「んー」の使用に集中している（62.7%）。(3)「あっ」や「うわ」など自己の内部的な原因から生起した緊急性を持つ表現は、何か外在の物事から引き起こされた話者の感覚を表す「まあ」とは共起しにくい。(4) 母語話者の「まあ」の直前の表現について接続的表現と標識的表現に集中しているのに対して、日本語を使いなれない学習者は「まあ」をランダムに用いてしまう傾向がある。(5)「まあ」の直後よりも直前のほうに標識的表現が比較的に来やすい。なお、

* 大葉大学応用日本語学科准教授

本稿の最終節では、「まあ」が用いられない場面の理由について検討した。

キーワード：まあ、直前の表現、直後の表現、標識的表現、接続的表現

「まあ」の使用傾向の分析
—より良い会話指導上の記述のために—

黄英哲

一、はじめに

「まあ」という語は話し言葉の専用表現で、副詞（飛田・浅田 1994）、感動詞（益岡・田窪 1995；門倉 1996）、談話標識（川上 1993,1994；加藤 1999；水野 2006）、フィラー（山根 2002）として捉えられてきている。「まあ」が用いられるに当たって短縮形の「ま」の形で現れることもあり、発話機能も幅広く応用されている。この母語話者たちが自然に口にした語は日本語学習者たちにとっては正確に身に付けられやすいものではない。先行研究では「色々な問題にこだわらない、という発話的意味が基本で、談話展開の判断停止表示の制御標識として機能する（森山 1989）」、「いろいろ問題はあるにしても、ここではひとまず大まかにひきくくって述べようとする（川上 1993）」、「今のところ、それほどではないが、どうにか（森田 1996）」、「とりあえずの反応で、頻繁に出現する背景には日本人が使用している「あいまい表現」による「ぼかし」コミュニケーションがある（加藤 1999）」、「処理過程の曖昧性を標示するもの（富樫 2002）」、「感情を表す時に発する「まあ」を除いて、「まあ」は相手との関係を意識して柔らかく伝えようとする働きがある（清水 2003）」、「曖昧性の標示ばかりでなく、推論過程に進む一段階の表示である（水野 2006）」などと記述されている。先行研究で言及された「まあ」の用法をまとめると、大きく三つに分けられる。つまり、①即時の判断や感想の提示を予告する。（森山 1989；川上 1993；森田 1996；加藤 1999；水野 2006）、②曖昧性を示す（加藤 1999；富樫 2002；水野 2006）、③婉曲的に伝える（清水 2003）、の三つである。しかし、「まあ」の意味上の分析についてはだいぶなされてきたが、「まあ」の具体的な機能分類、出現位置、適切な使用場面についてはもっと

明らかにする必要がある。本稿ではこの三点を研究課題として取り組む。

二、先行研究から得た示唆

前節ですでに言及した通りに、「まあ」の用法を「即時の判断や感想を提示する」、「曖昧性を示す」、「婉曲的に伝える」の三つに大きく分けることができる。「まあ」の主な先行研究について、森山(1989)、川上（1993,1994)、飛田・浅田（1994)、門倉（1996)、森田（1996)、加藤（1999)、富樫（2002)、清水（2003）、水野（2006）等が挙げられる。そのうち、川上（1993,1994）と加藤（1999）の論考では実例分析で、そのほかの論考では作例分析として進められてきた。しかし、森山（1989）のような意味的分析を中心とした記述の仕方であれ、加藤（1999）のような談話上の分析を中心とした記述の仕方であれ、先行研究に見られる類似的な記述をまとめると、やはり次の表 1 の右の欄に整理した通りに「即時の判断や感想の提示を予告する」、「曖昧性を示す」、「婉曲的に伝える」、の三つに大きく分けることができる。「即時の判断や感想の提示を予告する」については、話し相手の状態･行動に対する話し手が態度を表明する前兆として、「曖昧性を示す」については、物事、事態の明確化を回避する場合として、「婉曲的に伝える」については、会話進行を柔らかく進めたり、中断を防止したりする場合として捉えられる。

表 1　「まあ」の記述の整理

森山（1989）	川上（1993、1994）	浅田・飛田（1994）	門倉（1996）	森田（1996）	加藤（1999）	富樫（2002）	清水（2003）	水野（2006）	本稿
○表統○問こら話の提表る。○○か○おた　度系　々にわ、談開断をす　態明　色題だず展判示示。驚呼け制軽さ判　手だ　感見足展　相なる共意補に　意○をめ○的開○見○い題るてこひずかきる○転告○○表○　告　忠ろ問あしこはまま引く合題予　示括　言途な答　点　視換　曲り　婉断間　間せ　時か。　間ぎ　時せ　時か　手動断制場　相行判抑る　驚　感賞同心惑示　困示　暗憎　あ感嘆　れ・慨度調場　程強る　合　驚・嘆・非　ずはあ　ニチ自引せ　まにも　イアをに寄　なとれ○シブ分きる。　き、のす　び・制　・時る　くえ断てる　呼けのす　軽さ判しい　掛止発語○おたと用　りず応足　示　とえ反補明例　○あの○説○　んのの正情出れ　手働け極表　なか理果なが。相のか積に。相なる。　ら処結確報力る。○へきを的す。○をめ　情す発「ま　感表にる」相行促ま判軽る」　○を時すあ○にを「○をすあ　括説る　総にす　○的明文　○即判感を示る表　の時断想提す予現。告	※制　開　展御　※半受え※転　下撃難逃るの　攻非らす理示　遜※やか避心暗　極断同憚合　積なやを場謙　的定意る※　度極　行おか表　限見た先がつい　をめ※きぼな示　※度点志　限・限意達　界　※的味標て　感曖をしる。　直に性示い　※曖性示現。　味をす　表　現。
◎表統◎か　度系　態明　時せ　間ぎ	◎的◎　婉断間　曲り	◎にす　曲現　婉表る。	◎をぐ　間せ　時か。		◎な◎か入　つ　っ導　間ぎきけ・		◎てきるあ　捨働すま　切のを「」	◎にあかい　頭ま置　文「がて　「れる。	◎的え現。　曲伝表　婉にる

表 1 に見られるように、「まあ」に関する記述の仕方は多様である。「即時の判断や感想の提示を予告する」という概念に類似した記述を○の記号で、「曖昧性を示す」という概念に類似した記述を※の記号で、「婉曲的に伝える」という概念に類似した記述を◎の記号で示している。表 1 におけるすべての先行研究では○の記号が見られる。つまり、表 1 におけるすべての先行研究では「即時の判断や感想の提示を予告する」に類似した概念の記述が見られる。

本稿では、「まあ」の用法を下記の図 1 に示す通り、三大用法とし

て記述を試みた。右側は具体的な使用機能の整理である。殆どの機能は先行研究で言及されているが、③における「返答時の準備」、「発話再開の合図」は、本稿で新たに提示する機能である。

①【即時の判断や感想の提示を予告する】 話し相手の状態・行動に対する話し手が態度を表明する前兆	⇒	右記の前兆や予告：主張、概言、制止、驚き、賛嘆、非難、困惑、同情、憎悪、あきれ、感嘆、情報追加
②【曖昧性を示す】 物事、事態の明確化を回避する場合	⇒	曖昧化
③【婉曲的に伝える】 会話進行の中断を防止したり、会話を柔らかく進めたりする場合	⇒	口ごもり、言葉探し、時間稼ぎ、返答時の準備、発話再開の合図

図 1　「まあ」の用法分類

図 1 に見られる通りに、①～③の用法分類にはそれぞれ 12 項目、1 項目、5 項目の下位分類がある。①「即時の判断や感想を提示する予告表現」の下位タイプの数について②の「曖昧性を示すこと」と、③の「婉曲的に伝えること」と比べれば、①の下位項目が圧倒的に多いことが分かった。こうした現象から「まあ」は話者が何か主張する寸前に用いられる表現として比較的多用されていることも分かった。しかし、流暢さと反応の素早さが必要とされる口頭的表現が行われる際、「まあ」の直後に話者本人の明確的な主張陳述がすぐに後続しないと、そうした「まあ」は曖昧化や言い淀みの用法として思われやすくなる。

本稿では、上述した理由を以って、①「即時の判断や感想の提示を予告する」を「まあ」の原義として捉える。「まあ」の用法は「話し相手の状態・行動に対する話し手が態度を表明する前兆」から「曖昧性を示すこと」と「婉曲的に伝えること」の用法へ分化していると解釈できる。

三、研究データ[1]

インタビュー会話において会話参加者の役割が比較的に固定しているので、「まあ」の出現位置の観察をしやすくなる。そこで、本研究では、表 2 に示すデータを使って分析した。

表 2　研究データ

日本語母語話者の発話の収集	非母語話者の発話の収集
【ET コーパス（JJ)】 日本語母語話者同士のテレビ番組の 14 組のインタビュー会話	【ET コーパス（TJ)】 8 名の超級[2]日本語学習者がインタビュアーを務めた 14 組の会話
【ET コーパス（TJ)】 14 名の日本語母語話者がインタビューの応答側を務めた会話	【KY コーパス】 KY コーパスにおける 30 組の会話

これらのインタビューは全て一対一の形式で行われており、各会話の時間は 10～30 分である。そのうち、ET コーパス（JJ）も ET コーパス（TJ）も筆者が収集した録音データであり、KY コーパスは鎌田修氏・山内博一氏[3]が収集した OPI 形式[4]の会話データである。

ET コーパス（JJ）ではインタビュアーは全員ニュースキャスターかスポーツキャスターであり、一方の応答者側は、スポーツ選手、プロ野球チームの監督である。ET コーパス（TJ）におけるインタビューの目的は、「台湾に在住している日本人がどのように台湾の社会、文化、環境及び国民性などを感じ取っているのか」ということである。本研究では、このコーパスにおけるインタビュアーの非母

[1] 本稿で用いた文字化記号の意味については次の通りである。（　）あいづち　＝発話の重なり　＋発話の割り込み　【　】筆者からの説明　↓下降音調　↑上昇音調　…省略　、自然なポーズ　XXXX 聞き取れない箇所　○○地名、人名

[2] ET コーパス（TJ）における 8 名の日本語学習者の日本語能力については全員日本語能力試験の 1 級に合格している。その中の 4 名は日本の大学院を卒業し、現在台湾の大学で日本語教師をしており、4 名は日本の大学を卒業し、現在日本の企業と取引きしている台湾の会社か、台湾における日系企業に勤めている。本稿ではこの 8 名の日本語学習者の日本語能力を超級とみなすことにした。

[3] KY コーパスは、平成 8 年～10 年度文部省科学研究費補助による研究『第 2 言語としての日本語の習得に関する総合研究』（研究代表者カッケンブッシュ寛子）の成果の一部である。

[4] OPI とは、Oral Proficiency Interview の略語であり、日本語能力に対する判定は初級―下/中/上、中級―下/中/上、上級―下/上、超級の計 9 レベルに分かれている。

語話者と、インタビュイーの日本語母語話者に見られる「まあ」の表現を別々に集計する。また、本稿では、KY コーパスにおける中国語話者の学習者たちを対象にして、「まあ」の収集も行った。対象者については、初級グループ 5 名、中級グループ 10 名、上級グループ 10 名、超級グループ 5 名、計 30 名である。

四、「まあ」の実例

本節では図 1 で挙げていた「まあ」の三大用法の実例を示す。なるべく今回収集した研究データから拾い出すが、場合によって補助情報として先行研究で言及された実例をも引用したり、「まあ」と類似した表現も比較したりして説明する。

（一）話し相手の状態・行動に対する態度表明の前兆

話し相手の状態・行動に対する態度表明がなされる直前に、「まあ」がよく見られる。特に主張、概言（とりあえずの反応）、制止、驚き（心外）、賞賛、非難、困惑、同情、憎悪、あきれ、感嘆、情報追加（言い換え、補足、例示）などが示される前に、「まあ」がよく用いられる。

1、主張

例 1 に見られる「まあ」に伴った「～ですからね」と「～と思いますけど」は「まあ」の主張提出の機能の裏づけとなっている。

例 1

KUM：うん、でも、もう年だっていう、おっしゃいますけどまだ、ろくじゅうさんー

OHS：え、まだっていうか、もうっていうか、あれですけど、まあ、野球は好きですからね、（うん）まあ、できれば一年でも長くやりたいと思いますけど、ジャアンツだと、ちょっと、激務になるんでしょうね、それはちょっと耐えられないと思います、

【ET コーパス（JJ）】

なお、例 2～4 の「まあ」の後の「～ましょうか」、「でしょう」といった判断表現から、「まあ」には主張提出の機能を持つことが分か

る。

例 2 まあ、そろそろいきましょうか。（川上 1993a）【主張】

例 3 まあ、なんとかなるでしょう。（門倉 1996）【主張】

例 4 まあ、これ以上悪くなるということもないでしょう。

（門倉 1996）【主張】

2、概言（とりあえずの反応）

次の例 5 と例 6 の発話には、話者がさしあたってそういう措置や態度で対応していく姿勢が見られる。そういった姿勢の前に先立った「まあ」には、「とりあえずそうしよう」という態度が伝わっていると思われる。

例 5 HOS：まあ、とりあえず、行ってみるよ、

【概言】【ET コーパス（JJ)】

例 6

DOR：【…中略…】そして、チームはいい方向へ、みんなで一緒に向くっていう、これは、僕の最新目標ですから（うん）で、あとは結果付いてくると、ま、とりあえず、やらなくちゃいけないことをまずいまやっていくっていうこと、みんなは【…略】

【概言】【ET コーパス（JJ)】

3、制止

紛争や緊張感を鎮めるときには、「まあ」がよく用いられる。こうした「まあ」は制止の機能が働くと考えられる。今回の研究データから採集てきなかったので、下記の例 7 に示す通り、富樫（2002）で挙げられた例を示す。

例 7（けんかをしている二人の間に割って入って）まあ、まあ、まあ、落ち着いて。（富樫 2002）【制止】

4、驚き（心外)、賞賛、非難、困惑、同情、憎悪、あきれ、感嘆

先行研究で指摘された「驚き」、「賛嘆」、「非難」、「困惑」「同情」、「憎悪、あきれ、感嘆」の機能を持つ「まあ」の用例は日常生活で現れやすい一方、今回取り扱ったインタビュー性質の会話データには現れにくい現象がある。そこで、下記の例 8～15 に見られる通り、

先行研究で言及された用例を用いてそれぞれ「驚き」、「賛嘆」、「非難」、「困惑」「同情」、「憎悪、あきれ、感嘆」の機能を果たす「まあ」を紹介する。

例 8 まあ、すてきね（森田 1989）【驚き】

例 9 それはまあ、よかったですこと（門倉 1996）【賛嘆】

例 10 まあ、この子は、なんてことをするの（門倉 1996）【非難】

例 11 （夕立）ま、どうしましょう。傘持ってないわ。（飛田・浅田 1994）【困惑】

例 12 「きのう自転車とぶつかっちゃった。」「まあ、けがはなかった？」（飛田・浅田 1994）【同情】

例 13 よくもまああたしをだましてくれたわね。（飛田・浅田 1994）【憎悪】

例 14 ほんとにまあ最近の子どもは何考えてんだかねえ。（飛田・浅田 1994）【あきれ】

例 15 彼の絵は実にまあすばらしい出来だったよ。（飛田・浅田 1994）【感嘆】

5、情報追加（言い換え、補足、例示）

「まあ」には情報追加の予告機能も見られる。ここでいう情報追加とは言い換え、補足、例示のことを指す。次の例 16 のインタビュアーの WAT は、「四月に入ったんですよね」を「新入社員ということなんですけど」に言い換えている。この二つの発話の間に「まあ」が挟まれている。例 17 においては、話者は「まあ」の後ろに、自分には中国語ができないことについて説明を付け加えている。こういう場合の「まあ」は修正や追加的情報が提示される前の前置表現になると考えられる。例 18 においては、「まあ」の後ろに「誰かと行ったりとか」の発話が現れており、「まあ」は例示の予告に相当すると考えられる。

例 16

WAT：えーと、〇〇大学から、ミズノにお入りに、（そうです）この四月に入ったん（そうですね、はい）ですよね、これは、ま

あ、新入社員ということなんですけど、【…後略…】【情報追加（言い換え）】

【ET コーパス（JJ）】

例 17

MAU：うんー、そうですね、あのー、今から考えてみますとね、（うん）やはり、来てから、んー、特に三ヶ月ぐらいは（うん）えー、もちろん中国語はわたしはできない、（うん）まあ、ようするに、えー、まえに勉強したことありませんし、え……【情報追加（補足）】

【ET コーパス（TJ）】

例 18

SAM：もう、ね、でも、あのー、一緒にする、日本人がいない、ね、球団ですから、で、終わってから、一人でいつも、ご飯を食べにいったり、する

GOJ：や、一人ではない、まあ、誰かと行ったりとか、【情報追加（例示）】

【ET コーパス（JJ）】

（二）物事、事態の明確化を回避する場合

前節の具体例に見られる通りにそもそも「まあ」に後続するものは話者の判断や感想に当たる発話が現れることが分る。しかし、話し相手の情報要求に対して「まあ、ね」というだけの返事では、「話題を続けたくない」、「曖昧性を示す」という用法に転じる。つまり、話し相手が提示した情報内容に対して話者が積極的に応えたくない時に、「まあ」という表現が用いられる。「まあ」には感情、態度、見方をぼやかす機能があると考えられる。そのような具体例については今回のデータからは観察できなかったが、先行研究で言及された例を用いて説明する。例えば、例 19 と 20 に見られるように、話者は「まあ」を口にした直後、「ね」の後続によって自分の態度を曖昧化させながら、話を切っている。この二つの「まあ」の用例は先行研究から引用した作例であるが、普段の日本語会話には現れそうな用法である。

例 19

A：「東大受かったんだって」B：「まあ、ね」（飛田・浅田 1994）

例 20

（息子に）「あんた、数学 0 点だったんだって？」「まあね」

（飛田・浅田 1994）

「えーと」にも「あのー」にも「まあ」にも、話し相手に働きかける機能があるが、例 19、20 の「まあ」は「えーと」か「あのー」では置き換えられない。こういう事実からは、「まあ」には「えーと」か「あのー」には潜まない性質を持っていることが分かった。つまり、例 19 と例 20 における応答者側は「まあ」の使用によって、明確的な返答内容を回避している。「まあ」には保留的な態度を示す用法に転用していることが分かった。

（三）会話の中断を防止したり会話進行を柔らかく進めたりする場合

「まあ」は発話の途絶を回避するフィラーとして使われる。例えば、例 21、例 22、例 23 に見られるように、「まあ」の直後には、具体的な陳述が出ておらず、「あのー」、「えー」などの表現が後続する。「まあ」の使用によって適切な言葉遣いを探す時間が多少稼げたと考えられる。そうした場合の「まあ」は会話進行の中断を防止するための用法に転じられていると考えられる。

例 21

1TM2：【中略】来年はあれ、市長選挙するでしょう↓、（うん）本当は、あー、民進党に続けてやってもらいま、ますか、

2OKA：やあ、それはー＋

3TM2：＋もらいたいでしょうか↓

4OKA：あのー、まあ、あのー、彼女が、（うん）市長になってから、（うん）どれだけー、そのーぎょうせきーを上げられたのかなっていう、よくわかりませんで、（うん）あのー、だから【後略】

【ET コーパス（TJ）】

例 22

TM5：お好きになりますか↑

MAU：まあ、山登りとはちょっと違うんですけど、わたしは、日本では、あのー、すきー（スキー）、をやってましたので、あのー、やまは好きですし（はい）えー、まあ、あの、そういった意味で、歩く習慣っていうのは、その、（あー）まあ、ね↓、むかしから、トレーニングなんかで、ずいぶん色々やらされましたから　【ET コーパス（TJ）】

例 23

KUM：胴上げが、（はい）非常に喜んだ、きれいで、かたもまっすぐで、手も開いてて（そうですね）見事に決まってたっていう説が、あるんですが、

OHS：まあ、変な言い方ですけど、まあ、これで、まあ、え、ダイエーホークスのユニフォーム、着て、三回目だったんでね、（うん）ある程度、こう、す、体のほうも反応できたっていうかね【話者が笑う】

【ET コーパス（JJ）】

また、上の例 23 における発話の OHS の冒頭に来ている「まあ」は発話権を取得したい予告である。そして、次の例 24 における 2HOS の発話の先頭に来ている「まあ」は、話し相手の発話に割り込む前兆にあたる。これらの「まあ」は返答発話の準備にあたる表現だと考えられる。こうした表現の使用に伴い、会話の進行にも円滑さが感じ取られるようになる。

例 24

1NOB：それは、開けてみてのたのしみーみたいなところも、まあ、開幕から、ね、ま、まあ、開幕の予想＋

2HOS：＋まあ、とりあえず、行ってみるよ、

3NOB：あ、そうですか↓、おー、いきますか↓

4HOS：うん、うん、　【ET コーパス（JJ）】

次の例 25～例 27 に見られるインタビュイーの「まあ」も返答発

話の準備表現の一種であり、「まあ」の使用によって、インタビュアーのほうにはインタビュイーのほうが何か主張したい内容が来る予告が感じられるだろう。つまり、やりとりの受け継ぎもスムーズになっている。

例 25

NOB（インタビュアー）：野球終わって、（うん）まあ、こう、ゆっくりされる時間っていうか、おそらく今日みたいの、こう車の中にゆっくりされると思うんですけど、

HOS（インアビュイー）：まあ、車も、甲子園からって、あのー、宿舎に（あ、あのー）近い、（そうですか）ね、もう二十分か十五分で、（え）着いちゃうから、　　【ET コーパス（JJ)】

例 26

1NOB（インタビュアー）：濱中は、四番を打たせてましたけど、（うんー）そこのへんは、（うん）もう手探りして XXXX ない

2HOS（インアビュイー）：いや＋

3NOB：＋ある程度＋

4HOS：＋まあ、【返答時の準備】ね、将来のタイガースを考えるとね、（はい）でも、本当の四番のタイプじゃないんだよね、（あー、なるほど）え、四番っていうのはやっぱりー、松井のようなね、（松井のような）ま、【発話の再開表現】一時の清原だね、す、うん、あーいうタイプ、今、どこのチームの中、四番バターじゃー、いなくなっちゃったんだよね、うん、でも、数少ない、えー、四番に近いバッターとすれば、濱中だね、（はい）まあ、【発話の再開表現】四番っていうプレッシャーっていうのは（はい）相当のものですね、

【ET コーパス（JJ)】

例 27

YAK（インタビュアー）：横浜残留という選択肢、というのはどのぐらいですか↑【質問】

KOM（インアビュイー）：まあ、メジャーのオファーがなければ、

（うん）お世話になるっていうふうに伝えてありますので、はい

【ET コーパス（JJ）】

「まあ」は場合によって「話題の切り替え」、「発話の再開表現」として用いられる。例えば、前述した例 26 における「ま」の直前には松井選手のことが取り立てられたばかりなのに、「ま」の直後には突然清原選手のことに言及されている。この「ま」は文脈の切り替えに用いられるように見られる。そこで、「ま（まあ）」は間違えられた内容、途切れた発話内容から再出発する直前の表現標識、つまり、「発話の再開表現」として機能していると考えられる。

上記の例 21～例 27 における「まあ（ま）」は「えーと」と「あのー」に置き換えられるが、「えーと」は主としてつなぎ言葉、「あのー」は主として注意喚起、「まあ」は主として現段階の主張予告の意味合いが強い。したがって、ここに持ち込まれてきた「まあ」の表現には会話の中断を防止したり、会話進行を柔らかく進めたりする機能がある一方、話者の大事な感想、決心、主張を予告する意味合いも入ることが分かった。

五、母語話者と非母語話者における「まあ」の出現環境の比較

以上述べてきたように、「まあ」には三つの機能が潜んでおり、一つの「まあ」の用法はどれかの機能だけに属すという分類は出来ない場合もある。「まあ」の使用傾向をもっと明らかにするべく、「まあ」の直前と直後の表現特徴を分析した。分析する際、母語話者と非母語話者の発話を両方取り入れて考察した。

本節では今回のデータにおける日本語母語話者の発話に見られた 490 例の「まあ」を対象に、「まあ」の前後の文節に注目した。そして、日本語非母語話者の発話から観察された 407 例の「まあ」も取り上げて、比較と分析を行う。日本語非母語話者の発話に見られる「まあ」の出現状況は次の表 3 の通りである。

表 3　日本語非母語話者の発話に見られる「まあ」の出現状況

	初級	中級	上級	超級
あり	0 名/5 名 （0%）	1 名/10 名 （10%）1 例	8 名/10 名 （80%）84 例	11 名/13 名[5] （85%）322 例
なし	5 名/5 名 （100%）	9 名/10 名 （90%）	2 名/10 名 （20%）	2 名/13 名 （15%）

会話の性質と長短などの変数を除外し、単純に「まあ」の出現の有無という観点から検証すれば、初、中、上、超級の順で、「まあ」が使用されるようになってきた割合は 0%、10%、80%、85%という順で上昇していることが分かった。日本語能力が高くなるにつれて、「まあ」が使用されるようになったことも分かった。次の 5.1 節と 5.2 節で日本語母語話者と非母語話者の差異をめぐって、「まあ」の直前と直後に現れる表現の傾向を分析する。

（一）「まあ」の直前の表現

次の図 2 に示した通り、日本語母語話者の発話の中の「まあ」の直前の表現には、「接続的表現」、「標識的表現」、「発話の冒頭」、「取立ての表現」、「句の完了」、「名詞」、「格助詞句」、「修飾的表現」、「再開の合図」の 9 種類の表現が見られる。

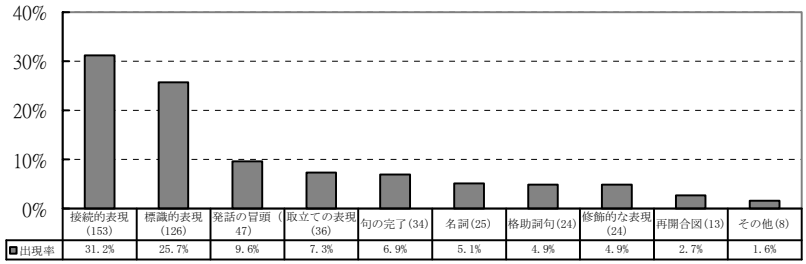


図 2　日本語母語話者の発話に見られる「まあ」の直前の表現

[5] 13 名の内訳は ET コーパス（TJ）の中の 8 名の非母語話者（インタビュアー）と KY コーパスの中の 5 名の超級レベルの日本語学習者である。

「接続的表現」とは、次の表 4 に挙げた表現であり、「標識的表現」とは、筆者が追加した幾つかの表現[6]以外に、主に益岡・田窪（1995）のいう感動詞に相当する[7]。

上記の図 2 から分かるように、「まあ」の直前にはいわゆる接続的表現が最も多く観察されている。それら接続的表現の出現状況の分析結果は次の表 4 の通りに示す。「けれども・けど・けどね・が【接続】・と【接続】」が最も多く現れている（24.3%）。それに続き、「～て（で）・ということで」（21.7%）「だから・ですから」（11.8%）といった接続的表現も多く観察される。それら接続的表現は文や発話の前半に当たり、普通その後半には話者の主張が提出される。それで、その間に挟まれてきた「まあ」には主張陳述の予告の性質を持っていることも推論できる。

表 4　日本語母語話者に見られる「まあ」の直前の接続表現の出現状況

けれども・けど・けどね・が【接続】・と【接続】	37	24.3%（一位）
～て（で）・ということで	33	21.7%（二位）
だから・ですから	18	11.8%（三位）
ので（んで）・から	15	9.9%
でも	13	8.6%
それで・これで・で【接続詞】	12	7.9%
それから・そして	6	3.9%
～ば	5	3.3%
～たら	4	2.6%
～し	3	2.0%
たり	2	1.3%
結局	1	0.7%
あとは	1	0.7%

[6] 筆者が追加した「標識的表現」には、それでは、やっぱり、こう、なんか、でも、こういった、そういった等がある。

[7] 眼前の事態に対する驚きを表すもの（あっ…）、眼前の事態や相手の言ったことに対する意外感を表すもの（なんと…）、相手の発言に対する同意、不同意を表すもの（はい…）、解答を模索中であることを表すもの（えーと…）、相手に呼びかけたり注意を喚起したりするときに用いられるもの（もしもし…）、自分に対する疑問の表現（はて…）、動作や行動の開始時に自分に言い聞かせるために用いるもの（さてと…）

つまり	1	0.7%
なにかというと	1	0.7%
ながら	1	0.7%
接続表現の合計数	153	100%

他方、「まあ」の直前の標識的表現においては、「あのー」、「えー・え」、「はい・うん・え↓」、「んー」、「やっぱり/こう/あー（あ）/っていうか/そう/ね/す/ひ/ほら/おー/う/や/なんか/やあ」といったものが観察される。そのうち、次の図 3 から見られるように「あのー」、「えー・え」、「はい・うん・え↓」、「んー」のような言いよどみだけで 62.7%（29.4%+13.5%+12.7%+7.1%）ほどを占めていることが分かる。それで、「あのー」、「えー・え」、「はい・うん・え↓」、「んー」といった表現が「まあ」の前に現れやすいことが分かる。

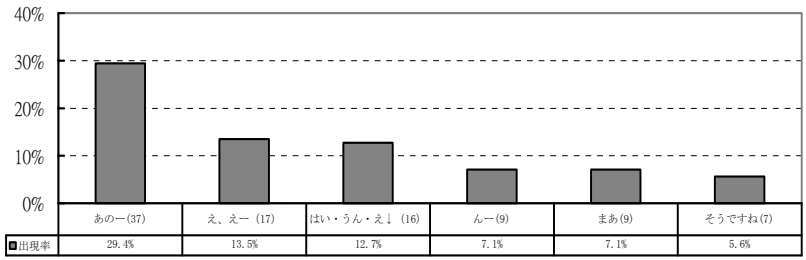


図 3　日本語母語話者に見られる「まあ」の直前の標識的表現の出現状況

「あのー」には、相手に働きかける性質が強く、「えー」、「え」、「んー」には言葉つなぎの性質が強く、「はい・うん・え↓」には伝達内容の切れ目の役割がある。これらの表現が「まあ」の前で共起しやすいのは、主張提出の直前の緩衝に当たるからである。こうした現象は今まで「まあ」に関する原義の推論とちょうど噛み合っている。また、図 3 にも見られるように、「まあ」の前に「あっ」、「さあ」のような驚き、決心を表す標識的表現は観察されなかった。「あっ」と「さあ」にはそれぞれ話者の瞬時の驚きと決心の気持ちが入

り、その後ろにそうした心境の打ち明けがすぐに出てくるはずである。「まあ」にも「あっ」と「さあ」に類似した機能がある。そこで「まあ」は「あっ」と「さあ」の直後に余計に現れない理由が分かった[8]。「あっ」や「うわ」など自己の内部的な原因から生起した緊急性を持つ表現は、何か外在の物事から引き起こされた話者の感覚を表す「まあ」とは共起しにくいと思われる。つまり、「あっ、まあ」や「うわ、まあ」などと言って驚きを示す人は殆どいない。

以上母語話者の発話に見られる「まあ」の直前の表現について考察したが、非母語話者の発話に見られる「まあ」の直前の表現を観察すると、中級グループでは「んー」の使用しか見られず、次の図4と図5、及び表5の整理を通して、上級と超級グループの発話には母語話者に近い表現が観察される。しかし、超級（図5）では母語話者グループ（図2）と同様に「接続的表現」の使用が最も多いのに対して、上級グループ（図4）では、「標識的表現」が最も多く観察されるという違いがある。

それにしても、超級グループにおける上位二項目の比率は非常に近い。非母語話者にとっては接続的表現に続く「まあ」よりも標識的表現に続く「まあ」のほうがなじみやすいことが分かった。こうした現象からは非母語話者には「まあ」の適切な使用が完全に把握していない可能性があることも推論できる。

[8] 森田（1996：1036-1037）によると、「まあ」は「ああ」や「きゃあ」「さあ」「なあ」「はあ」「やあ」「わあ」と同じ母音ア系統の声的感動詞である。自己の内部的な原因だけから生起する事柄には「ああ苦しい」「ああ痛い」「ああ、わかった」のように「ああ」「あ」を用い、「まあ」は外在の物事から引き起こされた感情・感覚に用いるとされている。本稿ではその主張を支持する。

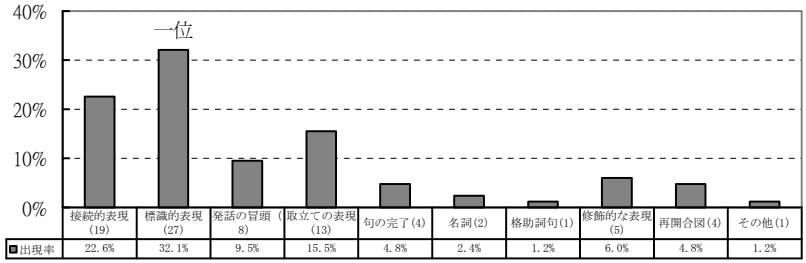


図 4　上級グループに見られる「まあ」の直前の表現

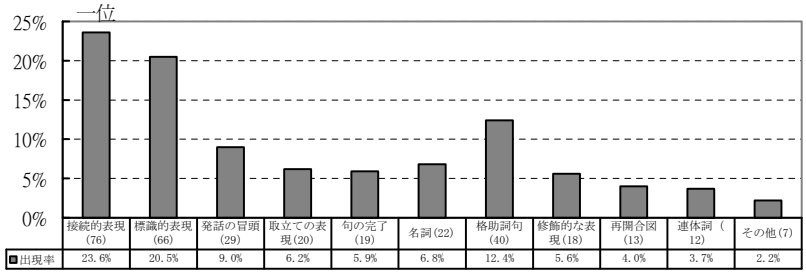


図 5　超級グループに見られる「まあ」の直前の表現

次の表 5 は「まあ」の直前に見られる上位五項目の表現の比較表である。三位以下の表現については、非母語話者グループからは母語話者グループの上位五項目に見られない表現が観察された。すなわち「格助詞句」、「名詞」、「修飾的表現」といった表現である。母語話者の「まあ」の直前の表現が接続的表現や標識的表現に集中しているのに対して、日本語を使いなれない学習者は「まあ」をランダムに用いてしまう傾向があることが分かる。

表 5「まあ」の直前に見られる上位五位の表現の比較表

日本語能力 / 出現率	上級グループ	超級グループ	日本語母語話者
一位	標識的表現（32.1%）	接続的表現（23.6%）	接続的表現（31.2%）
二位	接続的表現（22.6%）	標識的表現（20.5%）	標識的表現（25.7%）
三位	取立ての表現（15.5%）	格助詞句（12.4%）	発話の冒頭（9.6%）
四位	発話の冒頭（9.5%）	発話の冒頭（9.0%）	取立ての表現（7.3%）
五位	修飾的表現（6.0%）	名詞（6.8%）	句の完了（6.9%）

上記の表 5 から分かるように、「まあ」の直前に見られる表現については、どのグループでも上位二位の表現は同様である。しかし、上級グループにおいては、「まあ」の使用が標識的表現と最も共起しやすい。日本語能力が上がるにつれて、「まあ」が接続的表現と共起しやすくなっている。つまり、日本語能力がそれほど高くないグループは「まあ」を時間稼ぎの表現としての認識が高いことに対して、日本語能力の高い日本語学習者や日本語母語話者は「まあ」を主張提示の前触れとしての認識が高いからのであろう。「まあ」の使用を標識的表現と共起させるのは話者が話の進行が行き詰まっているからであることに対して、「まあ」の使用を接続的表現と共起させるのは、話者が計画的に主張を提示したいからだと考えられる。

超級グループの上位二位の順位は日本語母語話者グループのようになっているが、「接続的表現」と「標識的表現」の出現率の差については、超級グループは 3.1%（23.6%-20.5%）である一方、母語話者グループは 5.5%（31.2%-25.7%）になっている。「接続的表現」と「標識的表現」の出現率の差においては、超級グループは母語話者グループほど離れていないことが分かった。つまり、超級グループであっても、「まあ」を「標識的表現」と共起させる認識がやはり低くない。それで、非母語話者のほうは母語話者ほど「まあ」が適当に操れるかについてはまだ疑問に思われる。

（二）「まあ」の直後の表現

「まあ」の直後に見られる「標識的表現」について観察すると、次の図 6 に示した通り、母語話者グループにおいては、標識的表現の出現状況は「あのー」が最も多く観察される。出現量の順位は「あのー」に続き、「ね」、「まあ」、「でも」、「こういった（そういった）」の順で観察された。これら上位の表現の性質を考えてみると、「あのー」以外のもの、つまり、「ね」、「でも」、「こういった」、「そういった」等の表現においては、その続きの陳述が強く予告されている。こうした現象から、「まあ」の後ろには話者の主張、判断、態度がすぐに提示される場合が多いことがあらためて推測される。「まあ」はまさに話し相手の状態・行動に対する態度表明の前兆になることが分かる。

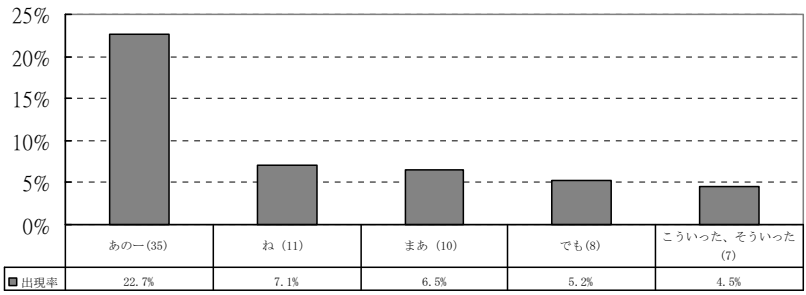


図 6　母語話者の「まあ」の直後に見られる「標識的表現」

すでに表 3 で示した通りに日本語非母語話者の発話に見られる「まあ」の出現状況は、初、中、上、超級の順で、「まあ」が使用されるようになっている。割合は 0%、10%、80%、85%という順で上昇している。つまり、日本語能力が高くなるにつれて、「まあ」を使用するようになったからであろう。

上・超級グループは徐々に母語話者と同様に「まあ」とほかの標識的表現を前後に組み合わせて使い始めているのが観察できたが、初・中級グループでは「まあ」の使用が殆ど見られないので、その

直後の表現が観察できなかった。なお、「まあ」の前後における標識的表現の出現率を分析すると、表 6 のような整理ができる。「まあ」の直後よりも直前のほうに「標識的表現」が比較的に来やすいことが分かる。

表 6　「まあ」の前後における標識的表現の出現率の比較

	母語話者	超級	上級	中級	初級
直前	25.7%	20.5%	32.1%	100%	0%
直後	15.5%	8.4%	11.9%	0%	0%

六、「まあ」の適切な使用場面

飛田・浅田（1994）では「まあ」が「用いられない」場面について「相手の判断や行動をそのまま肯定する場合には用いられない。」、「自分自身の切実なことについては、ふつう用いられない。」という記述があったが、「用いられない」理由については言及されていない。それについては、本研究で得た結論に基づき、「用いられない」理由を解釈してみる。例えば、次の例 28 に見られるように、発話 B1 の「まあ」は不自然である。なぜならば、発話 B1 の「まあ」は「感情を表す時の表現」と「推論過程に現れる標示」に当たっているが、話者 B1 は「絶対」と言っているので、このことに対する態度は「とりあえずの感覚」、「現段階の態度」ではないことが分かる。発話者の B1 は現段階の立場を示すわけではなく、永遠的な立場を示しているので、ここで「まあ」を使用すると不自然に感じられる。もし B2 のように「絶対」というのではなく、柔軟性を持って「似合うかどうかは別として」と言えば、「まあ」の使用はスムーズになると思われる。

例 28

A：この服、着てみようかしら。

？B1：まあ着てみろよ。絶対似合うから。

○B2：まあ着てみろよ。似合うかどうかは別として。

飛田・浅田（1994）

また、例えば、次の例 29 に示した通り、話者自身に施された痴漢の行動の嫌らしさは暫時的なものではなく、即座でしかも今後も変わらないものである。そうした場合では「まあ」の使用が不自然になる。むしろ「何よ」に入れ替えたほうが自然である。

例 29

？（痴漢に）まあ、嫌らしいわね。

○（痴漢に）何よ。嫌らしいわね。　　飛田・浅田（1994）

ただし、場合によって「まあ、嫌らしいわね」が用いられる。例えば、下記の例 30 のように、嫌らしいことを施されたのは話者自身ではなく、他人の場合であったり、話者自身が現場にいなかったりする時は「まあ、嫌らしいわね」と言えるのである。他方、聞き手自身が巻き込まれても話し相手の嫌らしさがまだ許せる範囲内の場合、「まあ、嫌らしいわね」と使う人もいるだろう。

例 30

A：「おれ、銭湯の女湯のぞいたことあるよ。」

○B：「まあ、嫌らしいわね」　　飛田・浅田（1994）

なお、テレビやラジオのインタビュー番組などで司会者や評論家が多用する現象が見られるが、ニュースを報道する真っ最中にアナウンサーが意味もなく「まあ」を多用することは見られない。「まあ」が「感情を表す時の表現」に当たるので、ニュースキャスターは正式なニュース報道に当たっては「まあ」を多用すると、まともに視聴者に情報を伝える姿勢が見られなくなる。まして「まあ」を使いすぎると、報道の中立性が疑われる。一方、テレビやラジオのトーク番組などで記者や評論家が「まあ」を多用する傾向が見られる。評論家たちがいつも求められているのは考え方や主張である。しかし、話が上手な評論家であっても、限られた時間で自分の専門性を提示するのが容易ではない。「まあ」は「感情表出」、「推論過程の標示（現段階の主張、発想提示の予告）」、「発話進行の流暢さへの配慮」、

「不明確さへの配慮」の融合体に当たる表現なので、評論家たちに愛用されたわけである。つまり、評論家たちにとって「まあ」という表現は自分が所有した莫大な情報、及び知識を暫時的で且つ簡潔に伝える効果がある。「まあ」の使用によって、評論家の専門性と説得性が集約されている感じを与えやすいと思われる。したがって、物事を評論するにあたって、専門性がある限り、「まあ」を連発すると、話し相手に違和感を与えてしまう恐れがある。例えば、子供たちには自分のクラスメートや友達にルールを説明するときに「まあ、こんな感じで」という表現の使用を聞いたことがあるが、「まあ」をやたら口にする子どもは聞き手に唐突な印象を与えると思われる。

日本語を母語としない成人日本語学習者の場合は、それぞれ各自の豊かな人生経験や学問上、知識上の専門性を持っているわけなので、日本語の会話の中で「まあ」を適宜に持ち込めば、会話進行の円滑さの面で効果がもたせると思われる。しかし、一定の日本語レベルに達していない学習者は「まあ」を口癖のように口にすると、聞き手の日本人の相手は耳障りに感じるであろう。子供と日本語非母語話者に見られる「まあ」の使用動機や発達過程の分析について今後の課題として取り組む必要がある。

七、まとめ

日本語学習者のより高い日本語会話力を養うために「まあ」の使い方をきちんと理解させたほうがいいと考える。そこで、本稿では、「まあ」について先行研究で取り上げられてきた記述を再考し、「まあ」の原義について「即時の判断や感想を提示する予告表現」として捉え、その原義から「曖昧性を示すこと」と「婉曲的に伝えること」の機能へ分化している解釈をしてみた。「話者の即時の判断や感想を提示する予告表現」については、主張、概言、制止などの 12 項目を分類することができ、「曖昧性を示す」とは、立場の曖昧化のことを指し、「婉曲的に伝える」とは、口ごもり、言葉探し、時間稼ぎ、返答時の準備、発話再開の合図を指している。したがって、「ま

あ」の性質を「他人の行動に対する話者の現段階の態度の前兆を表明したり、流暢さや曖昧さを維持したりする時の表現」として捉えられる。

「まあ」の出現位置の分析については、「まあ」の直前と直後の表現を観察することにした。

(1)「まあ」の直前の表現について

「まあ」の直前に見られる表現は、「接続的表現」、「標識的表現」、「発話の冒頭」、「取立ての表現」、「句の完了」「名詞」、「格助詞句」、「修飾的表現」、「再開の合図」等の 9 種類の表現が見られた。そのうち、接続的表現が最も多く観察されている。接続的表現と主張陳述の間に挟まれてきた「まあ」の使用が多い現象から、「まあ」には主張陳述の予告の性質が強いという推論もできた。「まあ」の直前に「標識的表現」も多く現れている。特に、「あのー」、「えー・え」、「はい・うん・え↓」、「んー」といった表現が「まあ」の直前に現れやすい。それに、「まあ」の前に「あっ」、「さあ」のような驚き、決心を表す標識的表現が観察されなかった。「あっ」や「うわ」など自己の内部的な原因から生起した緊急性を持つ表現は、何か外在の物事から引き起こされた話者の感覚を表す「まあ」は共起しにくいことも分かった。

非母語話者にとっては接続的表現に続く「まあ」よりも標識的表現に続く「まあ」のほうがなじみやすい。全体的に観察すれば、母語話者の「まあ」の直前の表現について接続的表現や標識的表現に集中しているのに対して、日本語を使いなれない学習者は「まあ」をランダムに用いてしまう傾向があることが分かる。つまり、「まあ」の使用を標識的表現と共起させるのは話者が話の進行が行き詰まっているからであることに対して、「まあ」の使用を接続的表現と共起させるのは、話者が計画的に主張を提示したいからだと考えられる。

(2)「まあ」の直後の表現について

「まあ」の後ろには話者の主張、判断、態度がすぐに提示される場合が多いことが推測される。「まあ」は話し相手の状態・行動に対

する態度表明の前兆になる場合もあると考えられる。そして、「まあ」の直後よりも直前のほうに標識的表現が比較的に来やすいことが分かる。

（3）「まあ」の適切な使用場面について

「まあ」の適切な使用場面に関する検討は下記の四点がまとめられる。（1）「まあ」の使用を「えーと」か「あのー」に置き換えられる場合が多いが、物事、事態の明確化を回避したい気持ちを表すときには、「まあ」が「えーと」か「あのー」に置き換えられない。（2）驚きや感嘆の「まあ」は単独では使用される場合が少なく、「おやまあ」、「あらまあ」、「あれまあ」、「ありゃまあ」、「なんとまあ」のように複合語として用いられる場合が多い。逆に、この場合は「まあ」を「言葉探し」として使っているとは考えにくい。また「あ、まあ」や「うわ、まあ」などと言って驚きを示す人は殆どいないが、言葉探しの「まあ」なら「あ、まあ」は用いられる可能性がある。（3）「まあ」は「話者の感情表現の一つ」として使えそうであっても、話者自身の内部的な原因から生起した緊急性を持つ感情表現は「まあ」としては相応しくない。（4）評論家たちにとって「まあ」という表現は自分が所有した莫大な情報、及び知識を暫時的で且つ簡潔に伝える効果がある。「まあ」の使用によって、評論家の専門性と説得性が集約されている感じを与えやすいと思われる。しかし、子どもや日本語を母語としない学習者たちには「まあ」の連発を控え目にすべきかどうかの考察について今後の課題として取り上げたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、匿名された査読者の先生方から大変貴重なご意見をいただきました。この場を借りて心より感謝の意を表したいと存じます。

参考文献

加藤豊二（1999）「談話標識「まあ」についての一考察」『日本語学・

日本語教育論集』第 6 号、pp.21-36
門倉正美（1996）「まあ」『あいまい語辞典』芳賀綏・佐々木瑞枝・門倉正美著、東京堂出版、pp.245-246
川上恭子（1993）「談話における「まあ」の用法と機能（一）―応答型用法の分類」『園田国文』第 14 号、pp.69-79
川上恭子（1994）「談話における「まあ」の用法と機能（二）―応答型用法の分類」『園田国文』第 15 号、pp.69-79
黄英哲（2011）「日本語母語話者と非母語話者の発話に見られる「まあ」の使用傾向」『2011（平成 23 年度）第 1 回日本語教育学会研究集会』日本語教育学会（2011 年 6 月 4 日，大分県・立命館アジア太平洋大学 APU）
富樫純一（2002）「談話標識「まあ」について」『筑波日本語研究』第 7 号、pp.15-31
清水泰生（2003）「「まあ」について」『埼玉大学国語教育論叢』第 6 号、埼玉大学国語教育学会、pp.83-90
飛田良文・浅田秀子（1994）『現代副詞用法辞典』東京堂
益岡隆志・田窪行則（1995）『基礎日本語文法―改訂版―』くろしお出版
水野吉徳（2006）「談話管理から見た標識「まあ」について」『日本語用論学会大会研究発表論文集』(2), pp.121-126
西野容子（1993）「会話分析について―ディスコースマーカーを中心として―」『日本語学』第 12 巻第 5 号、明治書院、pp.89-96
森田良行（1996）『基礎日本語辞典』角川書店
森山卓郎（1989）「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究 I』大阪大学、pp.63-88
山内博之（1999）「OPI 及び KY コーパスについて」平成 8 年度～平成 10 年度科学研究費補助金研究成果報告書『第 2 言語としての日本語の習得に関する総合研究』（研究代表者カッケンブッシュ寛子：課題番号 08308019）
山根智恵（2002）『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版